

枕草子の語詞：「うるはし」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北村, 英子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4641

枕草子の語詞

—「うるはし」—

北 村 英 子

女流作家によって仮名文字で書かれた『枕草子』には、特に諸種の美的語詞が多用され、作者の美意識の繊細さが窺われるが、今回はそれらの美意識表現の語詞の中から、極めて魅力的な「うるはし」という一語を取り上げ考察してみたい。

『枕草子』における「うるはし」という語は二十三語見当たるが、その全用語例のおよそ半数が黒髪を対象としているのは注意を惹く。

では、その黒髪のような状態を指すのか、また、どのような美の概念を捕捉しているのか等、黒髪用語例を詳細に検討する。

○ 御簾みずの内に、まいて若わかやかなる女房などの、髪かみうるはしくこほれかかりて (78段)

○ 髪かみいと長ながくうるはしく、下したりばなどめでたき人。 (153段)

○十八、九ばかりの人の、髪いとうるはしくて、丈ばかりに、裾いとふさやかなる。(183段)

○いとうるはしう、長き髪を引き結びて、物つくとして、起き上りたる気色も、らうたげなり。(183段)

○十七、八ばかりにやあらん、小さうはあらねど、わざと大人とは見えぬが、生絹の単衣の、いみじうほころびたえ、はなもかへり、濡れなどしたる薄色の宿直物を着て、髪色に、こまごまとうるはしう、末も尾花のやうにて、丈ばかりなりければ、衣の裾に隠れて、袴のそばより見ゆるに、(191段)

○ただいみじう、うるはし髪もたらん人も、皆立ち上りぬべき心地すれ。(207段)

○女は、額ひたひはれたるが、髪うるはしき。(一本・303段)

以上は成人女性の毛髪けがみの美しさを「うるはし」という語詞で表現しているが、それは「若やかなる」・「十七・八・九ばかり」・「いと長く」・「丈ばかり」・「こまごまと」・「ふさやかなる」という用語が指示するとおり、若い女性の長い垂髪の毛筋が一本一本すべて直毛であるのが、多く、まとまりに整髪された状態を捉えている。当時、女性の長い黒髪は最高の美人の条件であったため、その手入れは常に惜しむことなくなされていた。

洗髪には灰汁あかや油あぶらを用いたのが黒髪を美しく保つ秘訣であったようだ。毛質は直毛で粗硬である。洗髪後は水油を用いて何度も梳あいて光沢を出し整髪したことが知られている。黒髪に光沢があった描写は『栄花物語』に、

○黒き単の御衣に御髪は御衣よりは色にて、いとちたくはあらで、つやくと御衣にたまりたる程、いとあはれにな

まめかしく、心苦しう見えさせ給ふ。

とあるように、黒髪の色は美しく、つやつやと光沢があったことがわかる。つまり、当時の貴族の女性達は、水油を用いて整髪していたため光沢があり、べっとり滑りがある毛髪をしていた。

因に、『国宝源氏物語絵巻』の「東屋」の巻に、洗い髪を整髪している画面があり、非常に印象的である。当時の整髪の仕方を理解する一助ともなればと思いい次に示しておく。



(東屋)

中の君の洗い髪を、女房が横櫛を右手に持って梳いている画面である。

このように平安朝の貴族の女性達は洗い髪を、乱れないよう横櫛で何度も何度も梳いて水油を髪全体になじませ、一本細く長い毛髪を一まとめに手入れをし大切に保つのである。このように手入れをした一まとまりのつやつやと光沢のある黒髪の先の方は、きちんと切りそろえられ、扇を広げたような形になる。それが「うるはし」美と表現されている。

この「うるはし」美の垂髪には命が宿ると信じ、毛髪を長くのばすことは、命も長くのばすことになると考え、何よりも毛髪を大切にした。

さて、このように考察を進めてくると、今問題にしている「うるはし」という美は、乱れた毛髪を人工的に整髪した美しい毛髪をいう。したがって、整髪美を意味しているのである。また、「うるはし」は「潤ふ」の形容詞化と考え、毛髪がべつとりと水分を含んだような滑りのある状態である。そして、つやつやと光沢を伴った美しさを指す。

次に童の毛髪を「うるはし」と捉えている用語例を掲げて検討していく。

○小舎人童、小さくて、髪いとうるはしきが、筋さはらかに、少し色なるが、声をかしうて、かしこまりて物など言ひたるぞらうらうじき（51段）

○いと細やかなる童の、狩衣はかけ破りなどして、髪うるはしきが登りたれば、（139段）

○清げなる童部の、髪うるはしき、また大きなるが、髻は生ひたれど、思はずに髪うるはしき、うちしたたかに、むくつけげに多かるなど（一本・325段）

これらはすべて男童の毛髪の美しさを「うるはし」と捉えているが、その毛筋は直毛で粗硬な毛質はつやつやとして多く、ややもすると乱れて醜くなりがちな頭髪を櫛で筋目を入れ、人工的に整髪した美しさを「うるはし」と解くことが出来る。

結局、毛髪を「うるはし」美と感受しているのは、乱れた状態から人工的に整えた美を指す。換言すれば、醜から時間的経過を経て人工的に醸成した美をいい、そして、その整った毛髪に滑りのある光沢美が伴って貴品ある美の世界を構築

していく。それが毛髪に対する「うるはし」美といえよう。

次に装束に關する「うるはし」美について考察を進めることにする。

○ 暁に帰らん人は、装束などいみじううるはしう、烏帽子の緒、元結固めずともありなん、とこそおぼゆれ。(60段)

○ 「惟仲が声のしつるを、呼びて問へ」と宜たまはすれば、端に出でて、「左大弁に物聞えん」と、侍して呼ばせられたれば、いとよくうるはしくて来たり。(128段)

○ 御形の宣旨の、上に、五寸ばかりなる殿上童の、いとをかしげなるを作りて、みづら結び、装束などうるはしくして、中に名書きて、奉らせ給ひけるを、「ともあきらの王」と書いたりけるを、いみじうこそ興せさせ給ひけれ。(178段)

○ 昨日は車一つにあまた乗りて、二藍の同じ指貫、あるは狩衣など乱れて、簾たれ解きおろし、もの狂ほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にとて、日の装束うるはしうして、今日は、一人づつさうざうしく乗りたる後に、をかしげなる殿上童乗せたるもをかし。(208段)

○ 雪高う降りて、今もなほ降るに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、袍の色いと清らにて、革の帯のかたつきたるを、宿直姿にひきはこえて、(232段)

以上の五例を数えるが最後の用語例の「色うるはしう」の「色」については、何の色を指すのかよく分らず諸説がある。「新潮日本古典集成」では「容姿」と解し、『新日本古典文学大系』では「顔色であろうか。若さに溢れた顔色を言うか」とあり、『日本古典文学全集』では「袍の色か」とあり、見解は定しない。そこで『源氏物語』の「うるはし」語を調

べてみると、およそ七〇語余り見当たるが「容貌かたうるはし」というのはあつても、「顔色うるはし」という例は皆無である。したがつて、今の場合、「顔色」と解すると、「うるはし」という語詞の用法から勘案しても、理に適わないように思える。むしろ、「袍の色」と解した方が、『源氏物語』にも

○帝の、赤色の御衣奉りてうるはしう動きなき御かたはら目に（行幸）

このように「袍の色」に関して「うるはし」美を求めた例があり理に適うようだ。つまり、今の場合の「色うるはしう」は、男性官人の「袍の色」と解し考察を進めて行くと、『枕草子』（増田繁夫校注—和泉書院）の頭注に、

袍の色は、古く四位は深緋、五位は浅緋（衣服令）であつたが、一条朝ごろには、四位の深緋は、紫を交えて染めた、黒紫といわれるような色になつていた（政事要略・六七）

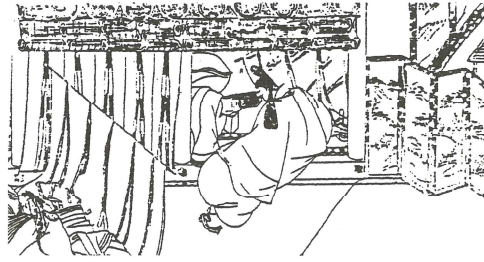
とある。これによると、五位の官人は浅緋の袍を着用し、四位の官人は黒紫の袍を着用し、それぞれ最高の装束に身を包み威厳がある。したがつて、五位・四位という位階に適った袍の色に格式美を感じているのである。

さて、先に示した装束に関する「うるはし」の五例について通覧しまとめてみよう。

これらの五例はすべて男性貴族（内一例は人形）の装束に関するもので、着方が乱れておらず、きちんと着付け身を整えている端正さを「うるはし」美で捉えている。五例目は先に述べたように位階に適った色の衣装を着用している姿が、その人物に相応しく威厳があり端正であると感受している。

もつとも当時の貴族の男性は、『国宝源氏物語絵巻』の「柏木二」の巻の画面が示すとおり、重病人で起き上がることが出来なくても、見舞に訪れた人と対面する場合には、烏帽子を被り、身なりを整え「うるはし」姿で会う慣わしがあつた

ようだ。その画面を示しておく、



二) 木 柏

柏木と親友であった夕霧は、冠直衣姿で、重態の柏木を見舞に訪れる。柏木は起き上がることができない程の重病人であるが、立烏帽子をつけて、白の衣を着、白の枕を縦て身なりを直し、端正な姿で対面している。

このように、対面する二人は、両者ともきちんと身なりを整え、「うるはしい」態度で語らう。すなわち、くだけた醜い状態から意識的に手を加え、格式張り威儀を正した姿を造り上げたのが「うるはし」である。それはきりつとした堅苦しい乱れない状態で冷たい感じのする端正美を指す。

次に糸を「うるはし」と捉えている用語例を検討していく。

○心ゆくもの、よく描いたる女絵の、詞をかしうつけて多かる。…(略)…うるはしき糸の練りたる、あはせ練りたる。(28段)

この一例であるが、「心ゆくもの」の一項目に取り上げられている「うるはしき糸」とは、真つ直ぐで光沢のある絹糸の美しいものを指す。『新日本古典文学大系』の脚注一二によると、

練糸を合せて糊で固め、束ねたもの。もつれず、たつぷりと束ねられているのだらう。

とある御説に首肯したい。それは先に毛髪の「うるはし」美の個所で言及したように、今の場合も同じく、光沢をおびた一直線状の細いものの多くが、一まとまりに整えられ束ねられた美しさを指しているからである。すなわち、ばらばらで醜い状態から整った美しい状態に手を加え造り上げた美を指す。結局、今の場合も、整美に光沢美が伴った美しさを「うるはし」美と捉えている。

次は「なまめかしきもの」の段の文中に表れる「うるはし」である。

○いと新しからず、いたうもの古りぬ檜皮葺の屋に、長き菖蒲をうるはしう葺さわしたる。(85段)

とあるが、「なまめかし」美と「うるはし」美とは『源氏物語』に、

○夜に入りぬれば、主の院方も、客人の上達部たちも、みな御前にて御饗応のこと、精進物にて、うるはしからずなまめかしくせさせたまへり。(若菜上)

とあり、美の性質が両者協調せず、むしろ、相反撥する関係にある。その「うるはし」が枕草子では「なまめかしきもの」を題詞とする文中に用いられているのは注目に価する。作者清少納言の特異な美意識を知ることが出来一興を感じる。では、今問題に取り上げている、「なまめかしきもの」の段の文中に表れる「うるはし」美を追求していくことにする。これまで言及してきた「うるはし」美は、毛髪美にせよ、装束の着付の美しさにせよ、すべて人物が関係しているものばかりを対象にその美は求められていたが、今の場合は植物である菖蒲に対して「うるはし」美が求められている。それは長い菖蒲がばらばらになつていたのを、きちんと人工的に整え醜い状態から美しい状態に移行し完成した美を指す。すなわち、長い菖蒲がきちんと整いきつて一まとまりになり、新しいというのでもなく、ひどく古びているというのでもない、檜皮葺の屋根という地味で優雅な雰囲気の中に、一際、魅力的に葺きわたしている状態を「うるはし」と捉えている。このように追求してくると「なまめかし」美は広くあたりの静かな雰囲気の中で醸し出され、地味でおとなしい落ち着いた優雅な美をいうのに対して、「うるはし」美は狭い範囲で、ばらばらに乱れた複数の物を人工的に整え美しくした整美を指す。したがって、地味でおとなしい落ち着いた優雅な雰囲気の中に「うるはし」美は堅苦しく一まとまりに整美され、「なまめかし」美の雰囲気の中に位置した場合、「うるはし」美は融合出来ず孤立し、弱弱い美の中で強固に日立ち存在する。このように考察すると、「うるはし」は堅い感じの美であるのに対して、「なまめかし」は弱々しい感じの美で、両者、相反する美である。

本書には、菖蒲を「うるはし」と捉えた場面がもう一箇所見当たる。

○五月四日の夕つ方、青き草多く、いとうるはしく切りて、左右荷ひたりをきになひて、赤衣着あかぎぬたる男の行くこそをかしけれ。(211段)

この文中に見られる「青き草」は菖蒲のことを意味する。当時は五月五日の節供に菖蒲草を使用するのは、貴族から庶

民に至るまで、全家庭にわたる。したがって、節供の前日である四日には、相当多くの量の菖蒲草を赤衣を着用した男まろこが切り取るのである。その切り口がきちんとそろっていて美しい状態を「うるはし」と称えている。すなわち細く長いものを一まとまりに手を加え揃え切った美しさを「うるはし」と捉えている。換言すれば、ばらばらで醜い状態にあったものを整美したのが、「うるはし」美といえる。

次の用語例をみていくと、

○「五節ごせつの局つぼねを、日も暮れぬほどにみなこぼちすかして、ただあやしうてあらする、いと異様なることなり。その夜までは、なほうるはしながらこそあらめ」(86段)

これは中宮の言葉である。「臨時に設備した五節の舞姫の控室を、日も暮れないうちに全部とり払い明けつばなし、へんな様子にしてあるのは、たいへんけしからぬことである。その当日の夜まではやはりきちんと整えたままにしておきたい」と解す。「うるはし」の対象は局で、一まとまりに整った形に作り上げた完成美を指す。それを崩すと醜い状態になり、「うるはし」美は消滅する。

結局、ここにおいても、先に言及したと同じく「うるはし」美は、人の意志によって、人の手が加わり造り上げられた美しさであるといえる。

次も人に関して「うるはし」美が向けられた例である。

○一の舞の、いとうるはしう袖を合せて、二人ばかり出で来て、西に寄りて向ひて立ちぬ。(137段)

東遊の場面である。舞人は六人または四人で舞うが、二人一組ずつ登場する。まず一番目は二人揃って走り出る。そし

て、西に寄つて向い合ひ、両手を前に出し袖を合せている。その袖の合わせ具合がきちんと揃つており、端止で美しいと称えている。たいへん精緻な審美眼の持ち主である。舞人は男性であるが、その舞人の意志により、一まとまりの整つた美しい動作を造り上げた完成美を指す。その美に到るまでには、醜い動作があり、幾度か練習を重ねた結果、このような整つた美を産み出す。すなわち、醜から美を産み出すには、時間的経過を経なければ美は造り上げることが出来ない。こゝうして出来上つた美は、人間の動作の一部を指す。人物の全体像を捉えている「うるはし」美は今のところ見当たらない。次は「うるはし」の対象が、土に向けられた珍しい例である。

○えせ者の家の、荒畠といふものの、土うるはしうもなほからぬ、桃の木の若だちて、いとしもがちにさし出でたる、
(139段)

この一例のみ見当たる。「土がきれいに整備されていない所」という否定表現で表れるが、作者の心中には、「土がきれいに整備されている所もあるが」という意識のもとに書かれたものと思われる。「うるはし」の対象を珍しく「土」に求めている場面ではあるが、今までの調査の段階においては、外の作品には例をみない。したがって、個性強い作者の独特な着眼点をここに知ることが出来る。

さて、この場面も「うるはし」の語義は先述したように「整美」と語訳するのが文脈上適当である。次は最後の用語例である。

○祭の還かさ、いとをかし。昨日きのふは、よろづの事うるはしくて、一条おほしの大路の広う清ろげなるに、日の影も暑く、車にさし入りたるもまばゆければ、扇あして隠し、居みなほ直り、久しく待つも苦しく、汗などもあえしを、
(208段)

賀茂祭の当日の様子のことである。祭の万事がすべて完璧にきちんと整っている状態を「うるはし」で捉え、一条の広い大路が塵一つなくきれいにしてある状態を「清げ」で捉えているのは、作者清少納言の微細な美意識によるものである。また、一方は祭の行事に関する必需品や必要な事をばらばらの状態から整えること、一方はよごれた状態から清浄な状態にすることであり、双方共時間的経過を経て人工的に完成された美を指す。このように、「うるはし」と「清ら」は双方相似た性質を有する美的語詞である。そして、王朝文学においては「うるはし」も「清ら」も有力な地位を占め、特に散文文学中においては極めて活躍をみせている。

以上「枕草子」の「うるはし」美について、一例一例考察を試みてきた結果、人物に関するものにその美が求められている場合が極めて多かった。特に女性の長い垂髪が整髪され、滑りのあるつやつやとした光沢美を有する端正な毛髪が主軸になり、次いで、童の髪・男性の装束・糸・菖蒲・土・局・袖を合す舞姿・祭の様子等が対象として捕捉されている。これらはすべて、視覚で捉えた美しさのみ見当たり、聴覚や臭覚や触覚で捉えた「うるはし」美は一例も見当たらない。「枕草子」は感覚の文学といわれ、視覚以外の感覚で対象を捉えている場面が、随所にみられるにもかかわらず、「うるはし」美は対象を視覚でのみ認識される美であるといえよう。また、「うるはし」美は、醜から美を人工的に時間的経過を経て造り上げた完成美である。このように視覚美である「うるはし」の語義は、「整美」・「端正」・「端整」・「端麗」と語訳すると文脈上相応しい。

（付記）

① 本稿中の「東屋」・「柏木二」の絵は、『國寶源氏物語繪卷解説』書（講談社）による。

② 『枕草子』の引用文は「和泉古典叢書Ⅰ」―『枕草子』（増田繁夫校注）による。

③ 本稿を成すにあたり、平成十二年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成金の一部をあてた。